

## 定植と同時収穫を目的としたカキの超短縮育苗と生産システム開発

### 1 中核機関・研究総括者

奈良県農業技術センター 脇坂 勝

### 2 研究期間

2005～2008 年度（4 年間）

### 3 研究目的

奈良県では、カキ栽培において大苗移植による早期成園化とそれに伴う苗生産方法の改善が求められている。このため、播種から一貫した育苗システム技術、効率的な大苗移植管理技術を開発する。

### 4 研究内容及び実施体制

- ① 集約型育苗方法の開発（奈良県農業技術センター、鎌田種苗園）  
セル成型苗による効率的育苗技術やポットへの移植等の管理手法を開発し、集約的施設利用による育苗技術を構築する。
- ② 育苗期間の超短縮化技術の確立（近畿大学、奈良県農業技術センター）  
1年性台木への接ぎ木法などを開発し、期間の短縮化と管理の効率化を確立するとともに、台木生育及び癒合状態を解析し、育苗期間の超短縮化に必要な環境要因を明らかにする。
- ③ 環境にやさしい耐水性生分解性素材を用いたカキ大苗移植用ポットの開発（（独）食品総合研究所、奈良県農業技術センター）  
育苗に適した材質や容量などを検討し、生育のよい安価な移植用生分解性ポットを開発する。
- ④ 大苗育苗に最適な軽量化用土の検討（奈良県農業技術センター）  
大苗養成で搬送・移植時に問題となる重量負担を軽減し、保水・排水性等を考慮した、より軽量・少容量で生育可能な用土条件を解析し確立する。
- ⑤ 大苗の移植適期の検討と早期果実生産の検証（奈良県農業技術センター、奈良県果樹研究会）  
移植時の苗の大きさと時期による初期生育と収量などの検討並びに実証を行う。並行して現地改植園での実用性を調査・分析・評価する。

### 5 目標とする成果

播種から一貫した育苗システムによる大苗移植技術体系を確立する。これにより、苗生産の効率化、樹齢及び新品種更新等による経営改善、耕作放棄の回避、果樹苗の流通体制の変化が期待される。

# 定植と同時収穫を目的としたカキの超短縮育苗と生産システム開発

## 奈良県の柿栽培

栽培面積2000ha(生産量全国2位)、  
うち1000haが昭和初期時代から続いている既成園

高齢樹の樹が多い

改植が必要

・従来の方法で改植すると、育苗から収穫まで7年かかる

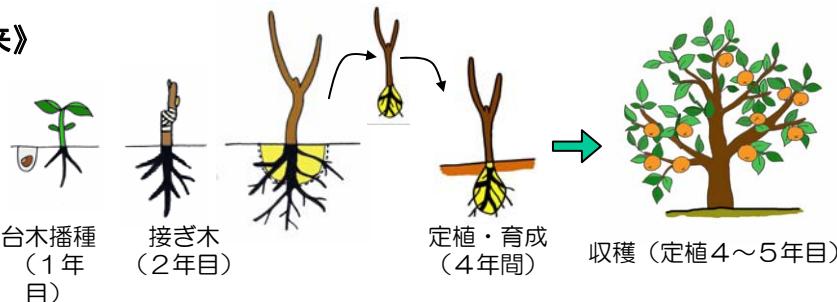
・生産者は本園定植後、4年間は収入がゼロ

・10aで年間50万円の損失

生産者が改植をためらうのが現状

## 収穫までの期間を短縮できる新技術

《従来》



7年かかる成園化

↓  
3年に短縮

### [苗生産]

一般的に果樹の苗木は育成に2年かかる。また、育苗管理が難しい。

### [果実生産]

- 移植の際に根を傷つけるので、生長が遅くなる。
- 苗も小さいので定植してから収穫までに4～5年かかる。

《新技術》

### 幼苗接木技術

- 発芽後すぐに接木する技術
- 短期間で多くの苗を生産
- 2年を1年に短縮

### ポット育苗技術

- 移植による植え痛みを最小限に
- 集中管理で苗の生育を促進し、本園定植の次年度から収穫が可能
- 4～5年→1年に短縮

### 新しい移植技術

- 軽い用土と生分解ポットにより、簡単に定植可能

## 園全体の若返り

若樹は品質の良い果実をつけるため収量が良くなる

生産者が改植しやすい環境を構築

収入ゼロの期間が無くなり、定植2年目以降の収量も増加

## 奈良県のカキ産地の活性化